



二十代集目錄

伊地知文庫
文庫20
260



文庫20
260

初身二十一代集

伊地知氏書冊

古今集 後撰集 拾遺集 後拾遺集

金葉集 詞花集 千載集 新古今集

新勅撰集 續後撰集 續古今集 續拾遺集

新後撰集 玉葉集 續千載集 續後拾遺集

風雅集 新千載集 新拾遺集 新後拾遺集

新續古今集



○古今集ハ人皇六十四代醍醐天皇御宇延喜
五年紀友則紀貫之凡河内躬恒壬生忠峯
等の撰キルニ十卷ナリ

○存撰集ハ人皇六十二代村上天皇御宇天曆
又平坂上望城原順紀時文大中臣紀宣
清原元輔等の撰キルニ十卷ナリ

○拾遺集ハ人皇六十六代一條院御宇長徳
年中大納言公任の撰キルニ十卷ナリ

或説ニ花山法皇の御自撰ナリト云云上
三代集之ソク

○存撰遺集ハ人皇七十一代白河院御宇
應仁三年中納言通俊の撰キルニ十卷ナリ

○全史存集ハ人皇七十六代白河院御宇
天治三年源俊親の撰キルニ十卷ナリ

○詞苑集ハ人皇七十六代近衛院御宇
天養元年左京大夫顯輔の撰キルニ

十巻有り

○千載集ハ人皇八十二代後鳥羽院御宇文治
四年藤原俊成の撰なり二十巻有り

○新古今集ハ人皇八十三代土御門院御宇
元久二年深通具在系之家在系定家
在系家隆在系雅経等の撰なり廿巻を
已とハ代作事と云ふ

○新勅撰集ハ人皇八十六代在堀河院御宇

貞永元年中納言定家の撰なり廿巻を
撰存撰集ハ人皇八十八代在深州院御宇

建長三年大納言為家の撰なり廿巻を
已上連弁の十代集と云ふ連弁新式に依

○續古今集ハ人皇八十九代龜山院御宇文永
三年前内大臣基通大納言為家侍從
行家右大臣辨光俊の撰なり二十巻を

○續拾遺集ハ人皇九十四代在宇多院御宇

弘安元年大納言為氏の撰なり廿七卷を云

○新嘉格集ハ人皇九十三代 昌三條院御宇
嘉永元年大納言為氏の撰なり廿七卷を云

○玉鬘集ハ人皇九十四代花園院御宇正和
元年大納言為氏撰なり廿七卷を云

○後千載集ハ同 文保二年大納言為世
の撰なり廿七卷を云

○後後拾遺集ハ人皇九十五代後醍醐院
御宇正中二年中納言為定の撰なり廿七卷

○風雅集ハ人皇九十七代光明院御宇
貞和年中花園天皇御自撰なり
二十卷を云

○新千載集ハ人皇九十九代後光嚴院御宇
延文四年大納言為定の撰なり廿七卷を云

○新拾遺集ハ同 貞治三年民部卿為
明の撰なり廿七卷を云

○新後拾遺集ハ人皇百一代後小松院御宇
永治三年中納言為重の撰ナリ廿七卷
○新撰古今集ハ人皇百三代後花園院
御宇永享十年中納言雅世の撰ナリ
二十卷アリ 新勅撰之下を十三代
としやせり

右と之和年中梓りの書籍目録と巻
和漢合通第一卷群書一覽は第四卷の
ら之宗牧云三代集 伊勢物語は
奇のり云之及之云云 作者の
近て連之奇の奇をあらはすと
よしやせりと云云 宗祇云連之奇ハ
奇書ハハ代集ハハ文選ハハハハハハ
云云 昌周云文龜の比をり 新勅撰後
後撰の二集を加へて十代集と
切奇に用ひたり 六をのつら長云

そんのもろくたはかりきと云
基佐云十三代集本より
まーくらしと作者は俊成御定家郷
家隆有家通具通光などの其つとを
うりかへへと云

連歌茶談殘編三十二

○三十一文字は予の恨えいふと云ふ
却りくる今集本の序
公云とつと今集本はよめよ八言
の文字ありけり

次まよ地風と云ふは
指遺集本よ

昔もよ集本の云ふまきと云ふは
類の

源氏抄

はらえれども涙もたもあらずめらむと涙れは涙

句一文字まなほの春を今

昔のまゆめをぬらさくらすよ思ふ人まほは

水はなれぬ一ののり一八三三集

はらえれぬまをまらさくらすよ思ふ人まほは

何のまゆめをぬらさくらすよ思ふ人まほは

我にせし思ふ人まほは思ふ人まほは

三三三集

あつた思ふ人まほは思ふ人まほは

又いふ集

あつた思ふ人まほは思ふ人まほは

又新古

あつた思ふ人まほは思ふ人まほは

あつた思ふ人まほは思ふ人まほは

二三三集

後於

みせみせこれくらけらふこよまたこをききき

又奥義抄子

ら社んをえから行れらのちんくらりー

又後撰

おふおふおふ人のなふおはからんておふん

母見之のほもなられん奇きき

おあつおあつおあつおあつおあつおあつおあつ

凡ておあつおあつおあつおあつおあつおあつおあつ

俊成師のほもなられん奇きき

楊おあつおあつおあつおあつおあつおあつおあつ

月おあつおあつおあつおあつおあつおあつおあつ

男おあつおあつおあつおあつおあつおあつおあつ

姫おあつおあつおあつおあつおあつおあつおあつ

遠藤人まつおあつおあつおあつおあつおあつおあつ

おあつおあつおあつおあつおあつおあつおあつ

武蔵守の令はなまきと善師の妻十二子ハ神祇イ
後撰集より上原の事方娘右近ひと男を
あひとりくはるしと奇

唐衣のけたまのめはまきひれまの由やめから
和泉式部うよめと奇

けふはれとてしんひてま一書守園のひとを
公任卿和奇は九品とたてられきり

共上この品れ奇二首 暮
仄くと此の頃の物方まきとれは形をり松本

まきとれかやまきとれは山守とたてられ
古今集集中第一はと奇

そのたれと見え別をててしんひと
後鳥羽院より俊成卿定家家隆友集

の奇とれと第一たきとて所長
内三人たきくは奇と古今十首の中は

第一乃秀逸行りてとれとてくは

まきこころ中もみよれくも書きて今終る也

後拾遺集

小大君

いふねたらくは川にゆきとせりを云ふ今終る也

今葉集

修理大夫顯季

打麻子まのまをう山川のいよまは永今終る也

詞花集

大藏卿匡房

氷のり志は幸時お解てさる夜よもるま風をそ

千載集

源俊賴

まのまをうたのまを身置せし書て今終る也

新古今集

攝政大臣

羨を地心も書て白書の傍に里よまきまをそ

己上

新古今集れ中の三夕の舟出さる

洪はは其色とれはかりたまの秋の夕もる 寂蓮

心はきぬも哀とれはかりたまの秋の夕もる 西行

身置せし書てはかり浦の心もる秋の夕もる 家兼

彩花

又六玉川七奇を二首つておきん

五巻

野面を燈米をて敷きれたるのまゝふちの玉川

六巻

見守る波柵をてく知のふまゝ玉川の里

七巻

玉川を晒を洞布をてくまきれたるのまゝおきん

八巻

ゆきをての地をの玉川秋をて色を浪を月夜

九巻

冬れの枯風をてみきたるの地を玉川傍に

凡雅

これとてはまゝとて孫のころの奥の玉川の水

己上

毒水紀伊ノ 千巻陸奥 萩近江

調布武松 卯花攝津 敷光山陽

とことらめていふ月ふとく指南歌を

ひらき武松をてくあやみぎ山やまぎき津の卯花の毒

拾遺集第七巻のおもひの奇の中よ松葉草

藟弱れ奇あり十二支の奇なり

まじりたし

とまじりたし水よぬきとてはまゝおきん

一ノ上ヤク

ゆさりれいまあまきりほろりかこあくまらあま
まあか註曰こえよやくと藟藟和名二曰
文選蜀都賦註藟藟其根白以灰
汁煮凝而成ル云云

子丑寅卯辰巳

ひよれりしとこい思存めり記名は前とわが
くし

午未申酉戌亥

ひよれりしとこい思存めり記名は前とわが
まあか註曰初は憂一と云一和移く
憂一和たなは二と云又十とぬわらぬと我
一和あまあぬのまう佐とく次と僻案
抄云け第二句文不後とす一と棧一
作れいよやぶらてたゆえす云山ま
え去の字よや人あていまを人

拾遺集第一卷をよ六月晦日お茅れ輪を
こゆらぬおまやこ

水着のほこれをいぢせの命のこころ
まふ註曰六月夜、疫病消除悪鬼
降伏等の功德ゆれ、六月晦日お茅の
輪をこゆらぬおまやこ
公る根原おらりとこり、又後拾遺集
第一卷をよ

思ふよみおまやこ麻のまきまよはれつとら
同注曰公る根原六月夜お法性寺に
池よりけしを詠と一と又まやこ云
又拾遺集第一卷をよ灌佛のまやこ

灌佛のあらをとりけし
おまやこおまやこ水着でおまやこ
同注曰灌佛のあらを本云灌佛、白女御
之布施、童女持参、及上人、扶持如法師

有るはたつとてし物同くしをいふ
いれつとて公の根原云け佛生今推
古天皇始事釋迦如來の俱思藍城
五生たまひんか為之は下りて水と
るききし釋尊よりせりしを
りく云たれはたふれたる水とハ權佛今
注にそり木をさるしはるはれ其水
やして交神信はらるるをたれとて

又後多雨院より定家卿の古今集れ亦
十首撰ひてまひりてしはるはれ

讀みよ

心宿る是れ圓をたつしはるはれ

記せらる

白虎十叶集に云はるはれ

出たる

秋風はまはるはれ

坂上見別

朝長はつとて思ひのほかにまよひしれり里もたれぬ者

壬生忠峰

る所のほれなきみこしれそへにほきもかき枝の

後人

なす川せれ運本にゆれいふせんとらひてとめえ

とてお行草

あつはあまのけいふま補あり同書れつれとて

後人

たふしとまゆつけさかたわたりたれり山花の

トヤ

又古今集誹諧奇々

おれなきまをたれれされぬくいとほひりたそら
いごんれおのれがほきしるまをたれぬく
秋風はほらぬき友なるよりたせよ茶室
ねもはらぬさるれにせつとたぬき

耳に九品の花——さくら木よりのもめくし厚く舞
人おらしてゆめはきやいゆめをきてもねとけいひんるや
永きあふ人をなまぬ報ひもあふ人のこころを思ふ

トコ

狂言合子白け音合にゆきの比きよらひんく公良
これにむいのはらうよ狂言をよらう左たふわち
はらひゆるたう——こころ

葉もふ狂言合十番あり——其中のい首をきえ
節らばあふはらうくまきまらたかかひん
波年いごら舞し音の四れをきだは年をこたれ
ねひねのいよらう——正月のちちをよらうまきん
正月半房斗の尻をきいよらうせりこく大根
下都くはらう海をきいよらうまきんあひわ
無心不可得まらひんき正月のちちをきいよらう

トコ

雨ごひれ狂言舞うと出せん

他國法師

そのはあ代木おせんせはまらまらと流れたる涙

肖柏法師

さうさうやあさのさみの女のこゝろ

宗祇法師

桐乃夏あをさうじを録のくくも

案ずるふ初身と祭のやとさともお其のあつて

感應ありし中詞書ふ平えまじり 市老袖が

文化八年の夏お十一の宝珠山おたのめで

そとこしー内

たみくたのあじいさうげ夏はあ

けり水着のあもあつてさうてくく口でり

けりあつてさうのあまをほろあつてさう

さう祈あの日教とせう自わりさうちにはの

さう日潤澤ああつて郷外あつてさう

さうさうさう又ちはみお能治の祭はあ

感懐はつらつとよきを思ふ

メミヤ田と足袋の神はく其角
案はふふこのえれ字と古本をもちたつたて
の三訓あつたての別ねり
又止雨れ祈りの初音を二首思ふ

鎌倉右大臣

之如やうに思はれはの歎き之八丈流丹の巻やめたま

ト

○初音の文母の指こと初音を巻軸おきん
御座りてや兄のふきおき今もいとやこはよ
らうや山影をよみおの

あつたつたわねるわんお 実女

案はふふあつたつたのそめ文とらほを思ふ
いけつては二首自れ音を思ふくまや 浮氏若
葉春ふ浮氏中ね山とて葉上ねき打きをて
文つらつたまひお祖母の尼にふまう 雅修

たふそくしんけいねんしん其比の
難保津の奇とあふんたることごとく
あつ古今席太子吟註下のらん

23

○古来の人これ秀逸行くとし称美せらるる如の
奇あり今又おまけ集めをくわん

仁徳天皇

言まやふまきこれ徳立民の寔に張りあふり
人の親心に固き神祇を子と思ひおまけひめあふ
水清の思ひれれりよまらばさすて依のけし
まほの目よきれりよまらばさすて依のけし
まほの目よきれりよまらばさすて依のけし
まほの目よきれりよまらばさすて依のけし
まほの目よきれりよまらばさすて依のけし

牛の毛もちおきんわいふんはむらむらふたれはま
位人七かき室の夜を月夜をせし海にうき
沖津枕吹けけし位を松をえさほよふ夜
物まききへき夜を年の九をわらふ夜をける夜
舞をほほの川をききめても井をわらぬ山
いらんや一林にまはし山をのりてまあけふた
池水かき月の夜をわらふ人か我十のころ
らふらふらふらふらふらふらふらふらふら
乃雅

一武士のけいけいけいけいけいけいけいけいけい
山果の舞のまをたかきかきかきかきかきかき
身まきかきかきかきかきかきかきかきかき
あ夜のせまの夜をききかきかきかきかきかき
お夜のまをききかきかきかきかきかきかき
けいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
かきかきかきかきかきかきかきかきかき
美すけいけいけいけいけいけいけいけいけい
俊恵

北実 範永 理信 長房 公実 公俊 堀川 乃雅 西行 人丸 貫之 遠 俊成 顯輔 俊恵

此の公令りて身ていつくしうてまて月とて
その振子これの非松る代わるとわら習りし
ちとちめにかれとて下すをこれ家王勲を行基は
終まきありのあはれはちちのあはれまて人たき
くおんくもなまていぬくは遠ち思ふまてのん
うれ初まはれをせしまていしまの業
能書書もまていぬくは遠ち思ふまてのん
終まきありのあはれはちちのあはれまて人たき

列樹 敏行 遍昭 公任 泉武 孝若 玉基 俊礼

此の十止まはれ業一はまていぬくは遠ち思ふまてのん
山平れ業の文多るまていぬくは遠ち思ふまてのん
萩のふと神あはれとて家のたのまていぬくは遠ち思ふまてのん
業ふとていぬくは遠ち思ふまていぬくは遠ち思ふまてのん
君これに相おはれとて業のたのまていぬくは遠ち思ふまてのん
まていぬくは遠ち思ふまていぬくは遠ち思ふまてのん
天の川にまていぬくは遠ち思ふまていぬくは遠ち思ふまてのん
すおん松たれとていぬくは遠ち思ふまていぬくは遠ち思ふまてのん

家隆 能因 顯昭 證岐 清輔 能宣 元輔 實定

蚤くいひし婦を女おのきき白のいふをほれり 素性
羊の窟をけりゆけりたぬいひたぬいふをほれり 行方
天の川を渡りて七女おのきき風をたぬやうにまゝ 中務
たぬいひたぬいふの物はたぬいひたぬいふにまゝ 忠致
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 行通
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 公志
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 安房
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 經衡
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 嘉言
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 礼宗
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 義定
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 赤南
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 盛房
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 永緑
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 乃濟
たぬいひたぬいふの月をいひ 昔はたぬいひたぬいふ 致中

意守りて相非凡波に秋も深く夏もわかの更 公継
小舟乗るをまきけ秋菊もたまごとく遠くけりる 家持
ゆきれもちりて道の昔も松よめぬ杖はくく 良年
杖よまきこえん水よこえりく出ありと 資集
こゝろたのひのひまはなはらぬ葉はくく 季保
ゆきまきけはまのまきけは神もはくくまたは 資隆
白波お利かへし浪もまきまきおのちの二より 重之
子百してまきけは浪もまきまきおのちの陰をたむ 清正
君代めちまの敷十くせくくおのちの十や五より 顯房
おのちのちまの敷十くせくくおのちの十や五より 後鳥

己上 九十五首

源氏物語

桐壺

心は行ま初まともひふかき初を以て心は後には

第廿

おのぬきまふまふのふまふのぬきまふのぬきまふ

空際

ふはせにお例をてきまふのぬきまふのぬきまふ

夕顔

ふせして地はぬきまふのぬきまふのぬきまふ

さうは茶

よはにうしろ外とらむ世の袪がよひく神さのさけ

未摘花

たろがきしるまはしはたひかま未摘花と神さのさけ

みまや

たれとよまきまよるくたはあまのさけとよらむま

花さあ

はまそとあまやとんこころまはたごがえらにんた

葵

はなまきちひられこのとらぬえらひもく未摘のさけ

殊

おぼいさじの枝はまきたれをいふまきてがは林と

花敷里

梅のまをたつりしけり花敷里をさけとくまよ

須磨

ふは危からせはの巻とさひまきと外いとく須磨の浦

明心

秋の空乃ほつき星の約よまきふらりて井をわかれ時のまは

漚標

おのむ打もてとてたんくあふふふふふふふふふふふふふ

まじり

ちるねとちあましとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

閑居

厚板のまはりぬきまはれとてまはれまはれまはれまはれまはれまはれ

後合

ふれぬとてそのおのれとてふれぬとてふれぬとてふれぬとて

松尾

似とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

まじり

ふれぬとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

羽衣

ふれぬとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

二廿

このまゝの神をひめじし神をまじりてよき神に

玉音

まじりて神をひめじし神をまじりてよき神に

初音

七月のまじりて神をひめじし神をまじりてよき神に

初音

花をひめじし神をひめじし神をまじりてよき神に

堂

まじりて神をひめじし神をまじりてよき神に

初音

花をひめじし神をひめじし神をまじりてよき神に

初音

かり力相まじりて神をひめじし神をまじりてよき神に

初音

見かた村まじりて神をひめじし神をまじりてよき神に

御年

をいぬ出さるまじけし松葉今りてかたき流るる様

蘭

おれ乃くあまぬきを落ししはよかきとほつた

と牛根

いふとねおるはぬき打れはく皮の根よ我らとて

梅枝

花れくあま枝を落ししはよかきとほつた

有るまじ

まじけしあまぬきを落ししはよかきとほつた

と牛根

山松葉を落ししはよかきとほつた

月

夕陽たたくし月まがて国と母とをばはる

梅枝

はるまじけしあまぬきを落ししはよかきとほつた

後角

後角の洞へ入るはあまの宮にたはりて

汁虫

たはりて美れきとて又は汁虫の宮にたはりて

クマカ

山果のたはりてあまの宮にたはりて

御法

たはりてあまの宮にたはりて

幻

あまの宮にたはりてあまの宮にたはりて

句文

あまの宮にたはりてあまの宮にたはりて

の梅

あまの宮にたはりてあまの宮にたはりて

作

作ははるちてあまの宮にたはりて

鴉

鴉のくちくちたきくちくちくちくちくちくち

推

まよふくちくちくちくちくちくちくちくち

継解

くちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

子

くちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

宿

くちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

車

くちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

は

くちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

野

くちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

心海

此を著したるは川の子集を以て作られたるなり

又字揚

法の師と云ふるを以て切らぬ山に云ふまゝなる

淨土の千冊をせよと巻にみせしむ

是の御きんを以てし

